



「共生 共感 創造」

学校HPアドレス

<http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/yokohamayoshida/>

よこはましりつよこはまよしだちゅうがっこうちょう
横浜市立横浜吉田中学校長

よね もり つかさ
米 盛 司

わたし じ こゆうようかん たか
私の「自己有用感」を高めてくれるのは…

3学年主任 青木 舞

がくねんつうしん か こ がっこう の わたし あおき にがて じぶん じしん す じぶん じしん ひび
学年通信や過去の学校だよりも述べているとおり、私（青木）は苦手なことがたくさんあって、自分に自信をもって過ごすことが難しい日々を過ごしてきました。小学校の時は、「自立することが怖い、怒られたらどうしよう」といつも心配していました。大人になってからの就職試験では失敗だらけ、自分は必要とされていないんだと落ちこむ毎日でした。

わたし だいす まんが きめつ やいば きさつたい おに たいじ そしき ぜんいつ どうじょうじんぶつ おれ おれ いちばんじぶん す
私の大好きな漫画「鬼滅の刃」では、鬼殺隊（鬼を退治する組織）の「善逸」という登場人物が「俺は俺が一番自分のこと好きじゃないちゃんやらなきやあっていつも思うのに 怯えるし 逃げるし 泣きますし 変わりたい ちゃんとした人間になりたい」と考える場面があります。臆病な「善逸」が、「鬼殺隊」としてみんなの役に立って、人を助けられる人になりたいと願うのです。また、同じく鬼殺隊の「柱（鬼殺隊の中で最強とされる人）」である「時透無一郎」は双子の兄に「無一郎の無は「無能」の「無」、「無一郎の無は「無意味」の「無」と冷たく言われます。双子の兄は、無一郎がその優しさのせいで命を落とすことが嫌だったので、そのように言って、わざと冷たくしてきたのです。しかし、兄は亡くなってしまいます。その時兄は、弟・無一郎の身を案じながら「本当は…無一郎の無は「無限」の「無」なんだ…自分ではない誰かのために、無限の力を出せる…」と言います。境遇の辛さから、物事を何でも忘れてしまう無一郎でしたが、ある時、兄の言葉を思い出し、強い鬼に立ち向かうことができるようになります。善逸も無一郎も、どちらの境遇も胸を打たれるものがあり、自分とは違う部分もありながら、「人の役に立ちたい」「自分ではない誰かのために」という彼らの心に共感します。そして、「私もそうなりたい」と何度漫画を見ても考える部分があります。

こんねんど がっこうせつめいかい さっし なか ほんこう めざ がっこうぞう いくせい めざ ちから じぶん りつ じこゆうようかん
今年度の学校説明会の冊子の中に、「本校の目指す学校像」というページがあり、育成を目指す力として「自分を律する心と自己有用感の確立」というものがあります。国立教育政策研究所によると、「自己有用感」とは、「人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価」だそうです。自分が、誰かのためになっているんだと感じることは、とても素敵なことです。私自身もそう感じたいと強く願って生きてきました。ただそれは、一分一秒でもできるものではなく、多くの積み重ねによって生まれてくるものだと思います。教育活動全体を通じて、生徒の「自己有用感」を高められるよう、自分が少しでも力になればと思います。

11期生とともに歩み、学年主任として3年目を迎えました。学年が終る3月の学年集会では、「青木企画」というちょっとした企画をやらせてもらっています。青木と生徒で相談し、学年所属の先生方一人ひとりに手紙を読む企画です。先生方は、手紙を読まれることは知っていますが、誰から読まれるかは知りません。私と11期生との秘密企画です。2年生の3月の学年集会、生徒に先生方への手紙を読んでもらい、無事終わった…と思ったところで、学年のある生徒が「ちょっと待ってください、まだ終わっていません！」と言いました。何が起きたのか！？とビックリしていたところ、「青木先生へも手紙を準備しました！」と言われ、何とも言えない、くすぐったい、嬉しい気持ちになりました。その手紙には、「先生はこの学年をよく見てくれていると私は思います。…作文を書くときお世話になりました。疲れたときは体調を気づかってくれました。足をけがしたときも一緒に授業の復習をしてくれました…。」とありました。先生方への手紙の中に、青木のものがないことに気づいた生徒が企画してくれたのです。また、個人的にお手紙をくれた人もいました。そこには、「いつも廊下で見守ってくれてありがとうございます。落ちこんでいるときは話しかけてくれてありがとうございます。」と書いてありました。私は、11期生にとって、少しは役に立っているのかな…。「青木先生ー！用事はないけど話しかけました！」という人がいたり、「髪を切って、青木先生と同じ位の長さです！いえーい！」と声をかけてくれる人がいたり、「先生、今日、私、誕生日なの」とそっと教えてくれる人がいたり、年に数回発行される、『学年通信』を目にすると、「これ、いつも楽しみなの！」と目を輝かせてくれる人がいたり、青木から気になる人に「お話ししよう」と声をかけると、「えー！」と言いつつこちらに来て、最後は青木とその生徒で泣きながら話をしたり…。「用事はなくても、そこにいる人」「話し相手」、何の役でも構いません。自分が必要とされていないんだと落ちこんできた青木ですから、11期生にとって、1ミリでも青木が役に立っているのなら、私は幸せです。言うまでもなく、私の「自己有用感」を高めてくれるのは11期生をはじめとする、横浜吉田の生徒たちです。本当に、いつもありがとう。それを支えに、これからも過ごしていきたいと思っています。